

専門学校 文化デザイナー学院

平成24年度 自己点検・自己評価報告書

平成25年6月

学校法人リリー文化学園

専門学校 文化デザイナー学院

平成24年度 自己点検・自己評価について

学校法人リリー文化学園 専門学校 文化デザイナー学院は、昭和24年に創設者である大久保久子氏が水戸市藤沢小路344番地にリリー洋裁研究所を開設したのが始まりになります。その後、和裁・洋裁、あるいはファッションの学校として発展してまいりました。現在のリリー文化学園は、専門学校2校、小学校1校、幼稚園2園、保育園2園、関連会社としてスポーツ施設や広告プロダクションなどを展開しております。

専門学校文化デザイナー学院はその中でも、リリー洋裁研究所の流れを継ぐものであり一番古い歴史を有しています。現在は「産業の中のデザイン分野」に特化したカリキュラムを持っています。広告プロモーションデザイン学科・ファッションコーディネート学科・インテリアデザイン学科という3学科で構成されております。

本校の教育的スピリットの根幹は、「教育とは愛である 教育とはアイデアである いつもあたたかく いつもあたらしく」という指針を掲げています。また、近年は「文化デザインマインド」として、デザインを通じた人間教育の実践を掲げています。

大きな特徴としては、平成7年から、産学官の連携に力を入れており、授業の中に実際のクライアント＝お客様（デザインの依頼人）を想定する授業に取り組んでおります。茨城県内の市町村や企業などからのプロジェクトの依頼も多くなり、少しでも茨城県、地域の為に貢献出来ればと考えております。現在は1年生から3年生まで全ての学年で産学官連携を実施しております。これらは、本校の特徴である「職業実践主義」を貫くものであり、デザインのプロセスである、取材（情報収集）→企画（情報分析と仮説）→制作→表現（プレゼンテーション）を内包するものです。文化デザイナー学院は、職業実践教育として、これらの4ステップに関わる技術・知識を習得することと、国家資格や認定資格等の取得、又社会のニーズ合った人間力を育てる教育を目指します。

本書類は24年度の自己点検・自己評価をまとめるものとし、ここに開示致します。各項目の評価の基準につきましては、平成25年3月文部科学省 生涯学習政策局から示されました「専修学校における学校評価ガイドライン」に準拠しております。よって、評価も4段階評価（4適切 3ほぼ適切 2ほぼ不適切 1不適切）を採用させて頂きました。丁寧な指示に感謝申し上げます。

平成25年6月

学校法人 リリー文化学園
専門学校 文化デザイナー学院
学校長
自己点検・自己評価委員長
飯村 雅史

自己点検・自己評価委員会

委員長

飯村 雅史 (学校長)

委員

入江 清芳 (学院長)

荒井 真次 (教務部長)

埴 麻美 (教務主任)

丸岡 修二 (専任教員)

佐藤 正和 (兼任教員・卒業生・デザイナー)

目次

評価基準1 教育理念・目標

I 教育理念 II 教育目標 III 教育方針 IV 年度方針

評価&改善

評価基準2 学校運営

I 学校運営の方針 II 授業計画について III 学校組織のありかた
IV 意志決定のプロセス V 業務の効率化

評価&改善

評価基準3 教育活動

I 学科編成における全学科と通しての共通な特徴

II 各学科の概要

III カリキュラムについて

IV 単位認定・成績評価の考え方について

V 資格取得・国家資格に向けた授業について

VI 業界との協力体制

VII 産学官共同授業について

VIII 業界からの授業成果に関する協力について

IX 修了制作展 作品の展示について

X インターンシップ

評価&改善

評価基準4 学修成果

I 就職指導の全体方針について II 就職目標設定と24年度報告

III 就職に対する本校の特徴 IV 就職指導体制

評価&改善

評価基準5 学生支援

I 学生支援体制

評価&改善

評価基準 6 教育環境

I 施設・設備状況について II 防災・災害に対する対応について

III 保険への加入について

評価&改善

評価基準 7 学生の受け入れ募集

I 募集の動き II 広報媒体 III 募集体制 IV 学費について

評価&改善

評価基準 8 財務

評価&改善

評価基準 9 法令等の遵守

I 個人情報保護について II 学校自己点検・自己評価について

III 学生作品と著作権の問題

評価&改善

評価基準 10 社会貢献・地域貢献

I 産学官連携の成果

II 産学官連携の一覧

評価&改善

評価基準 11 国際交流

I サンフランシスコ Academy Art of University との連携

II 今後の国際交流について

自己点検・自己評価 実施アンケート サンプル

産学官連携レポート

評価基準 1 教育理念・目標

I 教育理念

教育とは愛である 教育とはアイデアである

いつもあたたかく いつもあたらしく

(教務室掲示)

デザインは 見る人、使う人を楽しくさせるもの。

だから「相手を思う気持ちがデザインコンセプトの始まり」

これが、私達の「文化デザインマインド」です。

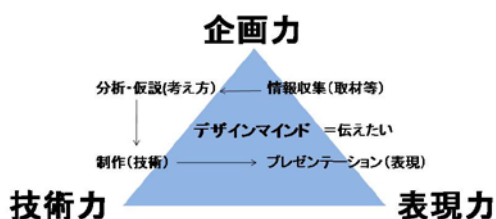
(各教室掲示)

II 教育目標

本校の教育目標は、教育理念に則り、運営を学校教育法に基づき、学生がデザインプロセスにおける技術を効果的に学ぶ事にある。本校の目指す人材育成とは、生活者が必要とするデザインを、実践的なプロセスによってより専門的に提案し表現し続ける事が出来る人材の育成を目標とする。

III 教育方針

- 1、職業実践主義
- 2、プロセス・表現主義
- 3、デザインマインド教育



本校の教育方針は、1、「職業実践主義」に基づき実際の職業を目指すためのカリキュラムや授業を構成し、2、「プロセス・表現主義」として、デザインプロセスである情報収集した事象を分析し、企画を考え、使う人・見る人にわかりやすく喜ばれるデザインを制作する事を目指すとともに、それを分かりやすく説明出来るように「プレゼンテーション」での表現技術を習得し、

3、「デザインマインド教育」として、ものづくりの精神を大事にし「良いものをつくるには、良い人間をつくる」という精神を教育方針とする。

IV年度方針

本校の年度方針は毎年3月に次年度の運営方針・教育計画を発表し、学園全体会議・教務会議・講師会議等で方針の徹底を図っている。

平成24年度学校方針

私たち文化デザイナー学院は、「デザインでの地域社会貢献をとおして社会の期待を越えて感動を発信します。」とする。

平成24年度事業計画

- ① 「地域社会をデザインする課題」への積極的な取り組みを通して、「社会へ貢献出来たという経験」により感動を伝えます。
- ② 「ファッションコーディネート学科」の内容充実のため、新しい感覚のカリキュラムで学生に感動を伝えます。

評価基準1 教育理念・目的

- I 教育理念
- II 教育目標
- III 教育方針
- IV 年度目標

評価項目	学校自己評価			
	4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1 学校の理念・目的・育成人材像は定められているか	④	3	2	1
2 学校における職業教育の特色は明確か	4	③	2	1
3 社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	4	③	2	1
4 学校の理念・目的・人材像・特色・将来構想などが学生保護者に周知されているか	4	③	2	1
5 各学科の教育目標、育成人材像は、学科等に対応する業界ニーズに向けて方向づけられているか。	④	3	2	1

課題

教育方針の周知について

今後の改善方策

学生、保護者に対しての方針・特徴の周知の強化を検討している。
「自分自身の目的を発見できるプログラム」が出来ていくような方向性も同時に模索したい。

評価基準2 学校運営

I 学校運営の方針（教職員の精神）

a, 一人ひとりを大事にする教育

学校を構成するのは基本的に教職員と学生である。そして、学校の起点は常に学生であり、学生が満足できる学校を実現するために、常に教職員は、学生との対話を大切にし、個人面接や個人指導に重きを置き、一人ひとりを大事にする教育を行うものとする。

b, デザインを通じた人間性・社会性の教育

デザインとは美術や芸術とは違い、産業的な職業として成立するものである。デザインマインドを学び、社会的に貢献できる人材を目指せるように、キャリア指導に力点を置く事とする。

c, デザインマインド教育と職業実践教育の連動

積極的に「問題解決型の課題」を地域社会や企業と連動して取り組むことは、学生がデザイナーという職業のプロセスを体験するのに大変効果的であり、常にデザインを通して問題の解決を考え、同時にデザインの精神である「デザインマインド」を学ぶ事が重要である。

II 事業計画について

事業計画については、中長期ビジョンと短期ビジョンに基づき、各学科の年度事業計画を決定し運営実行している。

その策定については、学校長を中心に教務部長や教務主任等、各学科のコーディネーターが意見調整の上決定している。重要な事項は全てディレクター会議（主任以上が出席）または最高幹部会議（学園幹部）により決定する。

III 学校組織のありかた（教職員組織について）

学校の構成は、大きくは①学生②兼任教員③教務職員になっている。その中で核になり中心的役割を果たすのが「教務職員」であり、学校運営の成否を左右するものである。教育プロセスを見据えた人材育成が必要である。

学校長を中心に、教務職員が、募集→運営→就職までまんべんなく仕事に係る。その範囲の問題はあるが、セクショナリズムの問題が発生しないという利点と、仕事全体を把握できることで、学校の運営プロセスが見渡せることが大切である。教務職員は、募集、運営、就職という相互関係のバランスの整った職業体験が必要であり、そのバランスが学生指導上も重要と考える。

IV 意志決定のプロセス（教務部意思決定プロセス）

常に学生からのアンケート（学生満足度アンケート）や意見に対して、学校長自らがそれを租借し、現場に問題点を提示すると同時に、現場からも問題点がフィードバックされてくるという相互プロセスの中で学校の意思決定を図る。教務部内の意思決定に関しては、PDCAサイクルで毎年の改善を図る。また、講師会議や各種専門業界からのご指摘や意見も踏まえた上で、重要な事項（学校の運営に関わるような案件）に関しては、ディレクター会議（主任以上が出席）または最高幹部会議（学園幹部）により決定する。

V 業務の効率化

事務局とのPCをオンラインで結び、学生の管理システムを一元化する事により、業務の効率化が図れる。事務処理の業務分担を明確にして、単純な事務処理は分業して効率化を図っている。また、SNSを利用することで、企業・団体との連携授業や他の学校とのコラボレーション授業などに幅広く効率化が図れている。

評価基準2 学校運営

- I 学校運営の方針
- II 授業計画
- III 学校組織のありかた
- IV 意志決定のプロセス
- V 業務の効率化

評価項目		学校自己評価			
		4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1	目的等に沿った運営方針が策定されているか	④	3	2	1
2	運営方針に沿った事業計画が策定されているか	4	③	2	1
3	運営組織や意思決定機能は、規則等において明確化されているか、有効に機能しているか	4	③	2	1
4	人事、給与に関する規程等は整備されているか	4	③	2	1
5	教務・財務等の組織整備など意思決定システムは整備されているか	4	③	2	1
6	業界や地域社会に対するコンプライアンスが整備されているか	4	3	②	1
7	教育活動等に関する情報公開が適切にされている	4	③	2	1
8	情報システム化等による業務の効率化が図られている	4	③	2	1

課題

企業・団体等連携におけるコンプライアンス

今後の改善方策

企業・団体等連携のルール整備が必要となるが、この中でデザイナー・学生等の著作権の問題等提出課題等の使用についてのルール設定が必要になっていっている。

評価基準3 教育活動

I 学科編成における全学科を通しての共通な特徴

a, 各専門分野の職業に必要な基礎力をつけるために1年目を基礎固めとし、2年目が基礎力の応用、3年目がデザイン実践力をつける3年間のステップとする。

b, 考える事、作る事、表現する事の基本は「手が動く」ということが重要であり、基礎の時点では「手を動かす」ことを十分に盛り込む構成とする。また、手を動かす演習においては、デザインの基礎を体に染み込ませる意味で重要であり、理論科目との連動で真の理解力が増す構成とする。

c, 全学科において、地域社会や企業と連動して取り組む課題は、学生がデザイナーという職業のプロセスを体験するのに大変効果的であり、常にデザインを通して問題の解決を考え、同時にデザインの精神である「デザインマインド」を学ぶプログラムを用意するものとする。

II 各学科の概要

a, 広告プロモーションデザイン学科 (昼3年)

グラフィックデザインの専門知識と技術の基礎を身につけた上で、実際の業務能力において業界の求める「現在のスキル」を付加したグラフィックデザイナーを育成している。1年次は、デッサン、平面構成、色彩理論、発想力、コンピュータリテラシー等を中心に基礎を固め、2年次は写真やイラストレーションやタイポグラフィ（文字）を素材としたグラフィックデザインをまとめて表現（プレゼンテーション）出来る技術を習得する。また、3年次は、地域社会との連携の中で、自らのテーマによってデザインを提案していくという能動的な活動への評価を重要視し、デザインの方向性を自ら考え出し「社会の問題点を解決出来るデザイナー」を目指す。近年の業界への「付加」的な分野として、WEBや携帯端末の普及における新世代の媒体についての授業は全員に必須授業とする。

b, ファッションコーディネート学科 (昼3年)

ファッションビジネス・ファッションコーディネート専門知識と技術の基礎を身につけた上で、実際の業務能力において業界の求める「現在のスキル」を付加したファッションコーディネートの専門家を育成している。1年次は、ソーイング、ファッションビジネス基礎、ファッションクロッキー、ファッションコーディネート基礎等を中心に基礎を固め、2年次は、ファッション制作やマーチャンダイジング等現場に則した授業を行うとともに、ファッションを時間軸やストーリーとして組み立てる練習を中心とし、3年次は、店舗やメーカーを想定したブランディングを実際の現場（近隣ファッションショップ展開）における立地や地域環境を考慮にいれて展開する実践的なファッションの体験を授業に含めていく。

c, インテリアデザイン学科（昼2年）・インテリアデザイン研究科（昼1年）

インテリアデザインの専門知識と技術の基礎を身につけた上で、実際の業務能力において業界の求める「現在のスキル」（＝3DCADなど）を付加したインテリアデザイナー・空間デザイナーを育成している。1年次空間の基本概念を理解し、設備、インテリアマテリアル、デザイン配色等の知識とともに、パースや基礎製図の基本をマスターする。2年次は家具、ガーデンデザイン、ディスプレイデザイン等でさらに基礎の土台を広げる事と共に、3DCADなどの演習で提案のまとめからプレゼンテーションまでの技術を習得する。また、3年次では、国家資格として二級建築士やインテリアコーディネーターの資格を受験するものとし、学生の現役合格を目指すものとする。

*二級建築士受験資格実務0年認定校（3年次に受験可能）

一級建築士受験資格実務4年認定校

Ⅲカリキュラムについて

a, 学生への周知

学生に配布している、オリエンテーションテキストⅠ、オリエンテーションテキストⅡにおいて、学則等の表記（抜粋）と単位認定の基本ルールを表記するものとする。主要科目の内容も表記し、年2回（学期始業時）行われるオリエンテーションにおいて周知する。

b, 講師への周知

各授業における年間のスケジュールについては、講師が授業の年間計画書を提出することとし、教務職員は内容や課題の調整等を目的等に擦り合わせた上で検討する。

半期ごとに授業時間を規定の時間に満たない場合は、補講期間に授業を行い、やむを得ず授業が行えなかった場合も規定数の時間は原則必ず行うものとする。

また、年間で2回講師会議を行う事とし、その中で「分科会」として企業・団体等連携授業等の打ち合わせやカリキュラムについてディスカッションし、各講師の先生方のベクトルを調整する一方、有効な解決策を見出す場とする。

c, 構成について

カリキュラム構成の考え方は、「企画力」「技術力」「表現力」を養うプログラムで構成され、授業全体の中で、デザインプロセス →取材（情報収集）→企画（情報分析と仮説）→制作→表現（プレゼンテーション）を見据えたカリキュラム計画を考えている。カリキュラム等については、これまでも業界各関

係者や企業・団体等から色々な意見を頂き、それを活用して構成し、現在に至っている。また、企業・団体等との連携においては平成7年から取り組んでいる。

意見を集約しながら、より実践的で即戦力となる人材を育成する為にカリキュラムの編成をする事はこれまでと同様であるが、今後は「教育課程編成委員会」を組織し取り組む事とする。

d, カリキュラムの全体構成の見直しについて

カリキュラム構成の見直しについては、業界や企業のニーズに応えられる人材を育成するための重要な作業である。年に2回行われる講師会議等で度々議論になるが、有用な人材を育成するためのプログラムとして、学生の能力、進捗度に合った緻密な作業を通して見直しをする必要がある。また、3年間におけるスケジュール、各学年の課題の出題内容、修了制作展の内容等（企業・団体等連携授業＝職業実践授業）も踏まえた計画が今後必要である。今後は学校長を中心とし、各業界団体、企業、卒業生、教職員のメンバーを抜粋し「教育課程編成委員会」を組織し、年間2回以上の会議を開催して、必要に応じてカリキュラム全体の構成を見直すものとする。

e, カリキュラムの評価について

カリキュラムについては、入学時に配布される「オリエンテーションテキストⅡ」に記載されている。

各授業についての評価として、毎年授業満足度アンケートを実施している。

カリキュラム全体の構成が、学生にとって魅力的かどうかを見通す意味でも学生全員により全科目実施している。

アンケート項目としては、以下の通りである。

- 質問1 時間配分と進行ペースは適当ですか
- 質問2 授業の目的と課題内容が合っていますか
- 質問3 学習機器の調整・整備がされていますか
- 質問4 学生一人ひとりの能力にあった指導を行っていますか
- 質問5 質問の対抗は丁寧ですか
- 質問6 授業時間は有効に活用されていますか
- 質問7 全体を通して授業の内容を理解出来ましたか
- 質問8 板書などはわかりやすかったですか
- 質問9 この授業に満足していますか

以上の項目において学生は、満足/やや満足/普通/やや不満/不満/を選択出来る。

また、項目として最後に各授業について自由意見が書けるようになっている。

本誌の最後に別紙として授業満足度アンケートの一例を添付する。

(各学科サンプリング 学年3 授業 教職員サンプル)

表示については授業別にまとめて集計し、円グラフによりビジュアルで理解できるように表記するものとする。

f, 授業満足度アンケートの活用

学生一人ひとりからの意見等を反映し、各授業ごとにシートを作成する。(巻末にサンプルを添付) それをもとに、教務職員やディレクター(主任)等で協議し、授業等の問題点を抽出し(特に問題が大きい場合)各先生とシートを利用して直接打ち合わせにあたり、問題点を解決する。平成13年から授業満足度アンケートを導入し、満足度は劇的に上がってきているし、年度毎の学生の動向の把握は、かなりしやすい環境にはなっているが、今後質問項目等の再検討を図りたい。

g, 24年度授業満足度アンケート結果報告

各学科ともに全体的な満足度が高く、学生が「ものづくり」に打ち込む姿勢がアンケートからも伺える内容であった。全学科をとおして、「満足」と「やや満足」・「普通」の合計が70%を超える内容であり、おおむね学生と授業が噛み合っていると判断する。細かい点で言えば、授業スピード(板書のスピード)や課題の出題時期についての調整や授業自体への目的意識の欠如が若干見受けられる点がある。また、グループワークそのものを苦手とする学生数が上がってきているが、本校はデザイン学校であり、人とのコミュニケーションは重要だと考えるので、そのような苦手意識からくる不満足に関しては、授業満足度とは別に考えなければならない。苦手な学生に対しては、コミュニケーションの重要性に関して教育して行く必要がある。

以上、24年度においては、学生がある程度満足できる適正な授業が行われているということが、授業満足度アンケートから判断できる。

h, 授業満足度アンケートのデータ化

授業満足度アンケートは平成16年からPCによる集計がなされるようになり効率化に成功している。学生が教材で使用しているノートPC上から打ち込めるようにプログラムを作成し、教務職員が行っているキャリアデザイン内で短時間で集計出来るように配慮した。

i, キャリア教育の観点に立ったカリキュラムについて

キャリア教育に対する考え方は、「キャリアデザイン」という授業を教務職員が運営しており、その中で1年生、2年生、3年生をフォローアップするプログラムが組まれている。

教務職員は教務部長を中心に、キャリアデザイン会議を開き、学生指導のプログラムを協議し内容を検討していく。「キャリアデザイン」は週1回の授業形式とし、キャリアデザイン会議は月毎、週毎にミーティングを行いキャリアプログラムを決定している。

キャリアプログラムとは、社会人を目指す上での生活指導、就職指導が主な内容であり、就職の為のマナー講座の実施や職業理解のための「卒業生を囲む会」（年1回実施）、「業界人を囲む会」（年一回実施）、就職模擬面接（年一回実施）、就職ガイダンス（年2回実施）、企業見学会等が含まれる。これらは、キャリアアップのプログラムとして学生への重要な情報提供として機能している。24年度も円滑に執り行われている。また、教務職員におけるキャリア教育への知見は、これらのイベント等への参加により自動的に養われ、学生への指導力も向上するものとする。

IV 単位認定・成績評価の考え方について

単位認定については、①出席、②課題、③試験により認定され、①出席であれば8割以上の出席とし、②課題については提出期限厳守と60点以上の素点評価（規定課題）、③試験（年2回の定期テスト）は60点以上の点数をもって単位を認定する。上記以外より単位不可とすることは原則無く、上記3つの項目の中で単位の認定をする。これは、単位の認定において、個人の恣意性が介在しない方式であり、公平性を保つ為のものである。半期毎に「単位判定会議」が執り行われ、判定の困難な事象に関しては、透明性の高い会議の場で判定を行っている。

成績評価については、A・B・C・D の4段階評価とし、Dを単位不可とする。

V 資格取得・国家資格に向けた授業について

資格を取得することは、デザインの専門分野における知識・技術を習得していることの客観的証明であると同時に、目的に向って継続的に努力でき得る証でもある。その意味で、職業能力の一部として資格取得を位置づけ、取得可能な学科によっては資格取得目標を設定している。

インテリアデザイン学科においては、国家資格二級建築士の資格は建築を目指す上で必須であり、建築専攻学生は全員の受験とする。また、インテリアコ

ーディネーターの資格取得講座も3年時に選択でき、インテリアコーディネーター専攻学生は全員受験とする。

<国家資格>

インテリアデザイン学科

二級建築士 受験資格実務0年認定校（3年次に受験可能）

一級建築士 受験資格実務4年認定校

二級建築施工管理技士

<取得可能な資格>

インテリアデザイン学科

二級建築士 インテリアコーディネーター 福祉住環境コーディネーター

CAD利用技術者検定 インテリアプランナー カラーコーディネーター

商業施設士/商業施設士補 リビングスタイリスト

広告プロモーションデザイン学科

カラーコーディネーター レタリング検定 Illustratorクリエイター能力検
定試験 Photoshopクリエイター能力検定試験 Webクリエイター能力検定試験
Webデザイナー検定

ファッションコーディネーター学科

ファッションビジネス能力検定試験 AFT色彩検定 販売士

ラッピングコーディネーター ネイリスト技能検定 Illustratorクリエイ
ター能力検定試験 Photoshopクリエイター能力検定試験 POP広告クリ
エーター検定 サービス接客検定

VI業界との協力体制

以下の業界団体から協力的なバックアップを頂いている。

茨城県建築士会

日本建築家協会 関東甲信越支部 茨城地域会

茨城県建築士事務所協会 茨城県建設業協会

茨城インテリアコーディネーター協会

日本建築学会関東支部茨城支所

茨城デザイン振興協議会

日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）

上記各団体とのコラボレーションで有名デザイナーのギャラリートークを実施している。学生が刺激を受けるのはもとより、茨城の中に新しいデザインの風を送り込むイベントとして影響は大きいと思われる。

ギャラリートーク実施

24年度実施 内田繁氏 特別講演会

カイトモヤ氏 特別講演会

VII 企業・団体等連携授業について

本校における大きな特徴としては、すべての学科すべての学年で、地域社会や企業と連動した授業が展開され、歴史をさかのぼれば平成7年よりその方向性を模索してきているということが挙げられる。行方市をはじめ、笠間市、常陸太田市、鉾田市などの行政をはじめ多くの企業・団体が地域や業界の発展のために本校との連携授業を積極的に活用して頂けるようになり、年間で10以上の連携プロジェクトを動かしている。

IX 修了制作展 作品の展示について

本校は年に一回作品展示会を行うこととする。

時期は2月に実施し、各学年のまとめとして展示する。教職員は、学生を指導し内外の関係者および地域への案内を含めて広く告知し、日頃の学生の学習の成果を展示出来るよう準備サポートする。また、この展示会が本校学生のデザインクオリティを評価するものとする。

X 実践的な職業教育について（インターンシップ）

全学科学年において、地域社会や企業と連動して取り組む課題は、学生がデザイナーという職業のプロセスを体験するのに大変効果的であり、常にデザインを通して問題の解決を考えるプロ養成のための実践的な職業教育として捉えている。これは広義の意味でインターンシップ（職業実践型授業）といえる。科目名としてインターンシップという授業もあり、それらの授業は単位として認められている。

評価基準3 教育活動

- I 学科編成における全学科を通しての共通な特徴
- II 各学科の概要
- III カリキュラム
- IV 単位認定・成績評価の考え方
- V 資格取得・国家資格に向けた授業
- VI 業界との協力体制
- VII 企業・団体等連携授業
- VIII 業界からの授業成果に関する協力
- IX 修了制作展 作品の展示
- X 実践的な職業教育(インターンシップ)

評価項目		学校自己評価			
		4...適切	3...ほぼ適切	2...やや不適切	1...不適切
1	教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか	4	③	2	1
2	教育理念、育成人材像や業界のニーズを踏まえた学科の修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか	4	③	2	1
3	学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	4	③	2	1
4	キャリア教育・実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などが実施されているか	4	③	2	1
5	関連分野の企業・関係施設等や業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直し等が行われているか	4	③	2	1
6	関連分野における実践的な職業教育(産学連携による、インターンシップ実技・実習等)が体系的に位置づけられているか	④	3	2	1
7	授業評価の実施・評価体制はあるか	④	3	2	1
8	職業教育に対する外部関係者からの評価を取り入れているか	④	3	2	1
9	成績評価・単位認定、進級・卒業判定の基準は明確になっているか	4	③	2	1
10	資格取得に関する指導体制、カリキュラムの中で体系的な位置づけはあるか	4	③	2	1
11	人材育成の目標を達成に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか	4	③	2	1
12	関連分野における業界等との連携において優れた教員(本務・兼務含む)を確保するなどマネジメントが行われているか	4	③	2	1
13	関連分野における先端的な知識・技能等を習得するための研修や教員の指導育成など資質向上のための取組が行われているか	4	③	2	1
14	職員の能力開発のための研修等が行われているか	4	③	2	1

課題

「プロ養成システム」のさらなる強化

今後の改善方策

専門学校等のより実践的な職業教育をふまえた上で、業界の最前線を体感できる授業としての価値を追求する為、「プロの現場で、プロの技を学ぶとともにデザインのプロセスを考える」という授業の方向性を模索したい。

評価基準 4 学修成果

就職指導の全体方針について

1年生より職業意識を向上させるプログラムの開発と、2年生から取り組む実質的な就職活動へのプログラム、さらに、3年時からの本格的な就職活動に備えるプログラムを充実させている。就職活動時に持参する作品集（ポートフォリオ）については1年生から制作に励み、一朝一夕ではできないクオリティの作品集を作り上げるノウハウも本校の一つの特徴である。

また、各学年各学科の修了制作において、産業界や地域社会の強力なバックアップのもとで行われる企業・団体等連携授業では、実際のデザインプロセスに基づく課題が制作されるので、学生はその作品集（ポートフォリオ）を持って就職活動に望めるのは、就職活動への自信にも繋がっていると思われる。

Ⅱ 就職目標設定と24年度報告

本校はデザイン学校として、デザインの専門性とデザインマインドを身につけた人材を育成することが目的である。従って、卒業生の最終就職率（就職者/求職者）は本校の教育と学生の職業意識に対する直接の企業評価と考えるので、毎年90%以上の就職率を目標として設定する。

24年度の卒業生の就職率は以下の通りである。

広告・デザイン系統 96%

ファッション・雑貨系統 100%

建築・インテリア系統 100%

Ⅲ 就職に対する本校の特徴

本校は、デザイン学校であり、「ものづくり」の精神を重んじる事も起因していると思われるが、大半の学生はデザイン業務への志向性が非常に強い。インテリアデザイン学科であれば、設計やデザインに関わる卒業生の数が圧倒的に多く、毎年おおよそ7割から8割に近い卒業生がその業務に就いており、クリエイティブ志向の強い学科といえる。逆に、建築分野における施工業務に就職する学生は少なく、震災以降重要性を再認識するところではあるが、求人が来ても就職したがないのが現状である。また、広告プロモーションデザイン学科では、従来のデザイン業務に加え、写真加工系やWEB上の仮想店舗運営、企業の販売促進部門等への就職も目立ち始めた。企業からは様々な広報媒

体を制作する能力が必要との要望もあり、オールラウンドなデザイン力（紙→WEB→映像→雑誌への対応）を養成するカリキュラム作りに力を入れている。ファッションコーディネート学科については、販売・管理職として大型郊外ショッピングモールから求人者の問い合わせが入っているが、全体的にゼネラルチェーン展開しているショップが人材確保に苦慮している点が見受けられる。今後とも業種理解への指導が大切になると考える。

IV 就職指導体制

就職指導に関しては、以下の3つのステップからなる

第一ステップ 「デザインマインド」を考えるプログラム

これは、高等学校から直接入学する学生が大半なので、職業としてのデザインを理解してもらうためのプログラムになっている。

a, 卒業生を囲む会

先輩からダイレクトに学校生活のアドバイス、就職活動のアドバイス、デザインの仕事内容について話を聞くことは、学生にとって非常に有意義である。

b, 業界人を囲む会

業界の動向に詳しい企業の代表者又は人事担当者をお呼びして、講演会形式で業界の動向や業務内容についての講演を頂く。業界理解への効果を発揮している。

第二ステップ 自立プログラム

a, 就職個人面談（相談編）

2年生で行われる面談で、就職に向けての職種相談や就職への心構えなどについて直接対話を実施している。

b, 就職個人面接（模擬面接）

デザイン系企業を想定する実践的な模擬面接。事前に教職員の寸劇で面接試験を想定した「良い学生」「ダメな学生」のインフォメーションが入る。

c, グループワークコミュニケーション

「水戸デザインプロジェクト」「水戸まちなかフェスティバル」「BUNKA祭」その他多数グループワークが行われている。

学科間、学年を超えてグループワークに取り組む事で、昨今の学生に不足しているコミュニケーション力をつける為のイベント。

第三ステップ 就職プログラム

就職活動の前提としては、上記プログラム①デザインマインド、②自立プログラム（自発性からくるコミュニケーション）がしっかり確率している事が重要である。

a, 現場・職場見学会

デザインの仕事に就くにあたって現場を見ておくことは大変重要なことである。インテリアデザイン学科では建築空間においてデザインを考えるのに効果的であり、広告プロモーションデザイン学科では印刷技術の知識と紙の種類を学ぶこと、ファッションコーディネート学科では店舗を取巻く環境の知識と客導線について学ぶというのが見学会の主旨であり、デザインの仕事を考えた場合、技術の現場が即ち将来の職業と密接に関係する。専門学校の性質上、学習プログラムと就職プログラムとは連動するのが好ましいと思われる。

b, 就職ガイダンス

定期的に行われ、就職活動のプロセスとして各学科・対象学年全員参加で行われる学校行事である。昨今の学生の動向から、なかなか動き出せない学生が急増し、粗雑な指導はかえって学生のモチベーションを下げる結果となる。学生の動向に合わせる緻密な指導が必要である。

c, 就職指導の内容

1年次（業界知識と目標設定 指導評価点＝モチベーションのUP）

- ・就職までの流れの説明 ・業界の知識 ・仕事の知識 ・目標の確認設定
- ・ポートフォリオ（作品集）の制作 ・モチベーションの確認（面談）

2年次（就職活動への具体的取組 指導評価点＝就職に対する能動的活動）

- ・就職の心構え ・前年度傾向 ・マナー講座 ・就職に対する質問 ・企業訪問
- ・写真撮影について ・履歴書 ・証明書類 ・模擬面接（全員） ・企業リストアップ

3年次（就職活動の結果の追求 指導評価点＝就職率と）

- ・企業リストアップ ・就職を見込んだインターンシップ ・就職面談（希望者）

d, その他の教務部の動き

・企業訪問（前年度就職先企業お礼訪問 5月）

卒業生の企業に訪問し、業界関係者から最新の情報を取り入れるとともに、本校の教育の問題点をダイレクトに探る事を目的としている。

・求人票送付（年2回 8月 3月）

評価基準4 学修成果

I 就職指導の全体方針

II 就職目標設定と24年度報告

III 就職に対する本校の特徴

IV 就職指導体制

評価項目	学校自己評価
	4…適切 3…ほぼ適切 2…やや不適切 1…不適切
1 在校生は、面接時に必要な自己アピール力を整えているか	4 3 ② 1
2 就職プログラム（企業訪問・求人票送付・模擬面接・卒業生を囲む会等）は適切にスケジュールされているか	④ 3 2 1
3 就職率の向上が図られているか	4 ③ 2 1
4 資格取得率の向上が図られているか	4 ③ 2 1
5 退学率の低減が図られているか	4 ③ 2 1
6 卒業生・在校生の社会的な活動及び評価を把握しているか	4 ③ 2 1
7 卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか	4 ③ 2 1

課題

「就職プログラム」の強化

今後の改善方策

就職指導においては、コミュニケーションの能力の評価基準が各企業共に高くなりつつあり、今後の「模擬面接」等の改善方策を模索していく必要性を感じている。

評価基準5 学生支援

I 学生支援体制

a, クラス担当について

各学年学科でクラス分けされており、それぞれに担当教員がいる。担当教員は、学生の生活指導や、キャリアデザインという授業を通し学生の就学意欲の向上、職業理解、実質的な就職指導まで一人ひとりとの面談も多く取り入れ支援する体制を整えている。

b, キャリアデザインについて

「キャリアデザイン=自立に向けた学生へのインフォメーションの時間」各学生へのインフォメーションは「キャリアデザイン」の時間に行われ、規定課題や練習課題等のインフォメーションや、出欠や清掃の指導など、学校生活の部分まで細かくインフォメーションされる。昨今は神経質・心配性な学生も多く、細かく気遣われたインフォメーションが重要である。そして、インフォメーションにおいては、「不公平感」の無いよう細心の注意をはらうものとする。

「キャリアデザイン」においては、週間と月間とインフォメーションの内容を教務職員ミーティングで協議し、テーブルの上に問題点を見える化することによって、指導の目的としている①デザインへの意欲 ②職業への意欲 ③社会生活への意欲の向上を目指すものである。

c, 奨学金及び学費について

経済的支援の必要性は年々増している事は明らかである。よって、本校では様々な奨学金及び国の教育ローン、民間の教育ローンなど広くインフォメーションしている。また、高等学校説明会や本校の説明会において、奨学金に関する案内を入れる事は近年重要になっている。また、保護者も交えた上での経済的相談は、進学に関して経済的な理由で諦めてしまっている学生にとって有効であり高等学校等でも強くインフォメーションしたい内容である。

奨学金等取り扱い一覧

日本学生支援機構奨学金制度

茨城県奨学資金

国の教育ローン

民間の教育ローン

d, 健康支援

学生の健康支援については、毎年健康診断を実施（学校保全安全法）している。結果は個別に通知している。インフルエンザや特定伝染病については1週間の出校停止とし、完治するまでは自宅待機とする。これらは、水戸保健所の指示に従うものである。また、ワクチン接種など校医による健康支援も行われている。

緊急用のAEDが1階に設置されているが、使い方については毎年訓練が行われている。

e, その他支援体制

遠距離通学者へのアパート情報等の対応やアルバイト情報等生活支援情報も掲示板等で支援をしている。アルバイトについては、年間に出される課題の数も多く、アルバイトに重きをおくと本業である学業が疎かになる恐れがあるが反面、学生生活の安定と職業の理解においてはプラスの側面も多い。特に、デザイン系のアルバイトについては学校が推薦している場合がある。

また、単発で行われる地域貢献型の課外活動については、学校から学生を推薦したり、積極的に活動に参加するよう促す場合があるが、それらは基本的に希望者による参加がほとんどである。

評価基準5 学生支援

I 学生支援体制

評価項目	学校自己評価			
	4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1 進路・就職に関する支援体制は整備されているか	4	③	2	1
2 学生相談に関する支援体制は整備されているか 0	④	3	2	1
3 学生にたいす経済的な支援体制は整備されているか	4	③	2	1
4 学生の健康管理を行う体制は整備されているか	4	③	2	1
5 学生の生活支援に対する支援体制は行われているか	4	③	2	1
6 保護者と適切に連動しているか	4	3	②	1
7 卒業生への支援体制はあるか	4	3	②	1

課題

保護者への対応
卒業生支援と情報交流

今後の改善方策

近年、入学式への保護者の参加率、体験入学会における保護者の参加率が増えている。4月に保護者説明会を行っており細かくインフォメーションしているが、さらに信頼感をもってもらうプログラムも今後の検討課題であり、改善が必要な部分である。また、卒業生との情報交流も現在のイベント(同窓会・卒業生を囲む会・企業訪問等)以外の交流イベント強化も力を入れていきたいと考えます。

評価基準6 教育環境

本校は水戸市の市街地の中心に位置し、企業や商店、商店街との連携が図りやすい。デザイン学校として、企業・団体等連携授業により職業的実践教育を行うにあたりデザイン学校としての立地条件としては十分である。また、学生にとって公共の交通機関が整っているため通いやすい。

I 施設・設備状況について

本校の教育上必要な施設・設備については、年度ごとに優先順位を検討し環境の整備をしている。次年度会計の予算に応じた設備投資予算を執行し、可能な限り施設・設備の維持向上を図っている。

II 防災・災害に対する対応について

防災計画については、毎年全学年において防災訓練を実施している。火事を想定した避難訓練になっているが、2011年3月11日の大地震を受けて、地震の場合も考慮・計画の対象に入れている。火事や地震を想定した全学生への避難指示計画は十分にマニュアルかされているが、想定を超えた災害も十分想定しなければならない。

III 保険への加入について

本校では授業中や通学途中の事故、課外活動の事故等への対応として学生全員に保険への加入を義務づけている。

評価基準6 教育環境

I 施設・設備状況

II 防災・災害に対する対応

III 保険への加入

評価項目	学校自己評価			
	4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1 施設・設備は、教育上の必要性に十分対応出来るように整備されているか	4	③	2	1
2 学内外の実習施設、インターンシップについて十分な教育体制を整備しているか	4	③	2	1
3 防災に対する体制は整備されているか	4	③	2	1

課題

防災・防犯等強化

今後の改善方策

2011年3月11日の東日本大震災をうけて、火災以外の防災対策もシュミレーションしておくのが重要であるので、火災訓練時の訓練内容に加えたい。

評価基準7 学生の受け入れ募集

I 募集の動き

①高等学校説明会

各高等学校を会場として行われる。本校の募集広報という意味も当然あるが、高校1年生からの説明を大事にしており、むしろ高校生のための職業理解の為の講座を受け持っているという社会貢献度の高い重要任務と考えている。

②高等学校 進路指導部訪問

募集についての各種情報の提供と、本校の認知度を上げる意味でも重要である。訪問の中には、生徒向けパンフレットの設置や推薦書類の説明、願書受付報告等の機会もある。

II 広報媒体

本校の特色を出すという事と、誇張した表現のない本来の姿をダイレクトに伝える広報を目指す。

本校の場合、産学官連携のパブリシティー（新聞・NHK・雑誌）に取り上げられるケースが年間5回以上発生し、効果・信頼感の向上は大きいと思われる。

①パンフレット ②産学官連携レポート ③WEB ④携帯サイト など

III 募集体制

原則として教務職員は募集→運営→就職という学生指導に関する全ての指導を行う。募集のみ担当するわけではないので運営や就職の状況も把握しており、高校の先生や、生徒に対し全体的な学校情報が伝えられる体制を整えている。

IV 学費について

現在適正な金額と思われるが、昨今の経済状況からしても保護者の負担は大きいと認識している。企業・団体等連携課題において、企業や団体等が課題制作時の取材費等（バス代金・食事代・研修代）を負担して頂けるケースがあるのは非常に有り難いと思っている。

保護者における経済的な負担を考えれば当然であるが、教務部の教材採用については、なるべく教育効果が高くその中でも低価格の教材を見つけ出す事に努力している。

評価基準7 学生の受け入れ募集

- I 募集の動き
- II 広報媒体
- III 募集体制
- IV 学費

	評価項目	学校自己評価			
		4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1	学生募集活動は適正に行われているか	4	③	2	1
2	生徒募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	4	③	2	1
3	学納金は妥当なものとなっているか	4	③	2	1
4	体験入学会のメニューは本校の内容と合っているか	4	③	2	1
5	高等学校への直接訪問を行っているか	4	③	2	1

課題

「デザイン」の楽しさを伝える

今後の改善方策

本校の特徴や基本概要等を的確に開示することで信頼感に繋げていき、かつ、「デザイン」の楽しさを伝えられる募集活動プログラムとして日々改善を加えたいと考えています。

評価基準8 財務

文化デザイナー学院の財務状況は健全である。今後とも教育内容の情報提供や募集活動の強化により、安定した学校運営ができる募集人数の確保と、業務の効率化を図り、財務基盤の充実を図りたい。

評価基準8 財務

評価項目		学校自己評価			
		4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1	中長期的に学校の財政基盤は安定しているといえるか	4	3	②	1
2	予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4	③	2	1
3	財務について会計監査が適切に行われているか	④	3	2	1
4	財務情報公開の体制整備は出来ているか	4	③	2	1

課題

損益分岐点を考えた運営

今後の改善方策

現在は、収支バランスにおいて良好である。募集の安定と損益分岐点を考えた運営を心がけたい。

評価基準9 法令等の遵守

文化デザイナー学院における運営は、教育基本法に基づいた学則によって運営され、専門学校設置基準等あるいは該当する各法令に従い、種々の申請・届出・報告など諸手続をすみやかに実施している。

I 個人情報保護について

個人情報に関する書類に教職員全員が理解し確認のサインをする様に指導している。（書類の内容要約）

II 学校自己点検・自己評価について

日常の業務の中で気づかない点等を発見し、改善案を出し、実行し、かつそれをまたチェックする事で、学校の教育力や運営力の強化に繋がる事は素晴らしいと感じている。平成13年から行っている授業の満足度調査によって授業そのものの質が自動的に底上げしてきた感が強い。このような、PDCAサイクルによるプラン作り・仕組み作りは、学校運営にとって大きなプラス効果として働いてくると思われる。

Ⅲ 学生作品と著作権の問題

学生の作品は学生の著作物として扱われ、その扱いに関する企業や地方自治体等に説明をする義務が、学校の授業の一環で行っている以上発生するものとする。これらにおいて、トラブルや誤解が無いように細心の注意を払う事とする。

評価基準9 法令等の遵守

I 個人情報の保護

II 学校自己点検・自己評価

Ⅲ 学生作品と著作権の問題

評価項目		学校自己評価			
		4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1	法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4	③	2	1
2	個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	4	③	2	1
3	自己評価の実施と問題点の改善を行っているか	4	③	2	1
4	自己評価の結果を公開しているか	4	③	2	1

課題

情報の開示について

今後の改善方策

開かれた学校運営の為に、情報の開示につとめ、関係者等への信頼感を確保する

評価基準10 社会貢献・地域貢献

I 企業・団体等連携課題の成果 作品/プレゼンテーション

本校における大きな特徴としては、平成7年度から、企業・団体等連携授業に力を入れており、授業の中に実際のクライアント（デザインの依頼人）を想定する授業に取り組んでいる。茨城県内の市町村や企業・団体などからのプロジェクトの依頼も多くなり、少しでも茨城県や地域の為に貢献出来ればと考えている。現在は1年生から3年生まで全ての学年で企業・団体等連携課題を実施

している。これらは、本校の特徴である「職業実践主義」を貫く中心的な授業であり、デザインのプロセスである、取材（情報収集）→企画（情報分析と仮説）→制作→表現（プレゼンテーション）を内包するものである。文化デザイナー学院は、職業教育としてこれらの4ステップに関わる知識・技術の習得に集中して力を注ぐ教育を目指しています。

過去3年間における企業・団体等連携課題の取り組みを以下に列挙します。

II 企業・団体等連携課題の一覧（過去3年間）

アルベトレッペ食堂 常陸大宮市/2011年
里ガールキャンペーン企画 行方市/2012年
鉾田いちごキャラクターデザイン 鉾田市/2010年
Z to A 私たちのすべて 2012年
「モノクロミライ」プロモーション チャプターハウス日立市/2012年
笠間いなり寿司プロモーション 笠間市/2011年
ひたちなか海浜鉄道「応援キャラクター9」ひたちなか海浜鉄道/2011年
那珂市活性化プロジェクト 那珂市/2010年
常陸太田青い巨峰プロモーション 常陸太田市/2010年
水戸市が元気になるプロジェクト 水戸市/2010年
北茨城市立図書館の新築計画 北茨城市/2011年
那珂湊エリアの新しい銀行の設計 ひたちなか市/2012年
千波湖周辺の活性を考えた 野外イベント施設の提案 水戸市/2010年
太陽と海と… 大洗の家専用住宅の計画 大洗町/2010年
磯原駅周辺専用住宅の計画 北茨城市/2011年
ひたちなか市海に見える家の設計 ひたちなか市/2012年
那珂湊駅を登録文化財にする 店舗計画 ひたちなか海浜鉄道/2012年
ショップコーディネートで北茨城を元気にする 北茨城市/2011年
水戸駅ビルショップ開発 水戸ステーション開発/2010年
那珂湊駅にある石蔵のインテリア計画 ひたちなか市/2012年
磯原駅前商店街店舗デザイン 北茨城市/2011年
エクセル南ショップ雑貨コーディネート EXCELみなみ/2011年
水戸市少年自然の家の商業施設としての改修・改装の提案 水戸市/2010年
本町一丁目二丁目商店街「賑わいの仕掛け」の提案 水戸市/2010年
インテリア雑貨が創る豊かで快適な空間 香陵住販/2010年
ape オリジナル商品企画 ape/2011- 2012年

水戸京成百貨店ディスプレイデザイン 水戸京成百貨店/2012年
喜久蔵久米洋服店ディスプレイデザイン 喜久蔵久米洋服店/2009年
ホテルテラスザガーデンフラワーコーディネート展示 ホテルテラスザガーデン/2011年
「みとペタ」プロモーション みとペタ実行委員会/2011-2012年
行方市あきんど観光交流賑わい空間デザインコンテスト 行方市/2010年
みなとメディアミュージアム車両内展示 みなとメディアミュージアム/2011年
四川厨房炎神ディスプレイデザイン 四川厨房炎神/2011年
橋本旅館カフェスペース提案 橋本旅館/2012年
イオン水戸内原店ショップ研究 2010 - 2012年
水戸京成百貨店クリスマスリース展示 水戸京成百貨店/2012年
リリーベール小学校ガーデンデザイン リリーベール小学校/2012年
水戸デザインフェス2010タンブラー展 水戸デザインフェス実行委員会/2010年
ガーデンデザイン展「ガーデンに住む」 ザ・キャスデザイン/2010年
第4回建築の力 日本建築家協会茨城地域会/2010年
第5回建築の力 日本建築家協会茨城地域会/2011年
エコキャッププロジェクト2010
エコキャッププロジェクト2011
キャンドルナイトプロジェクト 2012年
第6回建築の力 日本建築家協会茨城地域会/2012年
Mito☆ファッションショー 水戸/2012年
水戸黄門まつり京成通り商店会ワークショップ子どものための屋台村 2012年
水戸まちなかフェスティバル ワークショップ10 2012年
茨城県近代美術館ワークショップ 茨城県近代美術館 2012年
*巻末に産学官連携レポートを添付してあります(写真等)

評価基準10 社会貢献・地域貢献

I 企業・団体等連携の成果

II 企業・団体等連携の一覧

評価項目		学校自己評価			
		4…適切	3…ほぼ適切	2…やや不適切	1…不適切
1	学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	④	3	2	1
2	学生の自由参加による社会貢献度の高い地域連携ボランティアを奨励、支援しているか	4	③	2	1
3	取り上げる「テーマ」は教育効果や地域への貢献度等の基本的要件を満たしているか	4	③	2	1
4	企業・団体等連携授業において、良い評価をいただいているか	④	3	2	1

課題

連携課題としての、選抜基準等の整備について

今後の改善方策

企業・団体等連携授業において、沢山の地域・企業からお声をかけて頂けるようになった。その中で、毎年の課題の選定も含めた組織としての動きとしてガバナンスの強化を図る事が重要であり、学校全体で方向性を見定めながら連携事業に取り掛かれるようにしたいと考えている。企業・団体等連携委員会を教務会議の中の小委員会として立ち上げたい。

評価基準11 国際交流

I サンフランシスコ Academy Art of University との連携

平成4年（1992年）より平成22年（2010年）まで19回続いた国際交流プロジェクト。アメリカのサンフランシスコにある姉妹校Academy Art of Universityとのコラボレーションプロジェクトで、3日間にわたる交流イベントを毎年行っていた。本校もデザイン学校、相手もアートスクール（デザインも含む）ということで、アートイベントとして発展し、親善を含む国際交流ということで、サンフランシスコ市より正式に認定されていたイベントです。両校とも100名程の学生が参加し、総数200名程の学生を各校5名5名の10名前後でワークグループを作り、毎年異なるテーマでデザイン作品を共同作業で制作をしていくプロジェクトです。企画→制作→プレゼンテーションのプロセスを持ち、「ものづくり」を通したイベントとして最高のポテンシャルを持っている。

現在は、残念ながら2011年3月11日の東日本大震災により休止しております。

II 今後の国際交流について

今後は、サンフランシスコ以外に、国際交流の候補地として24年度は上海の学校を視察し、25年度はシンガポールの学校を訪問・視察した。現在、「アジアの熱風プロジェクト」としてアジア圏に注目しているが、特にシンガポールは治安も安定しており、ラサール大学など私立の大学に好感触を得ている。今後の展開により、プログラム化出来ればと検討している。

添付書類

授業満足度アンケート一部抜粋

産学官連携レポート

国際プロジェクトしおり